愛知教育大学附属高等学校研究紀要第 49 号
pp.133～141（March, 2022）

続・自由英作文指導実践

―継続実践と過年度比較検証から―

英語科　　川上　佳則

「英語発信力」の向上と「問題発見能力」の素地となる「社会に向ける関心の広がり」を期待し、2021 年度の第３学年生徒を対象に、自由英作文指導を行なった。
　意識アンケートと生徒英作文からは、生徒の英作文表現活動に対する自信の高まりに加え、流暢さにつながる語彙の伸長を期待させる結果が得られた。また、同実践の過年度比較から、初期指導の有用性と客観的な視野の広がりに繋がる仕掛けのヒントが見えてきた。

自由英作文指導　Lexical Complexity　（語彙の複雑さ）　問題発見能力　客観的視野の広がり

(1) 研究の背景及び目的

グローバル化に対応できる人材育成を強く意識する昨今の英語教育において、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養うこと」が主要な目標の 1 つであり、「聞いたり読んだりしたことに基づいて英語で話したり書いたりすることによって表現するなどの機会」を日々の授業の中に数多く盛り込むことが求められている（文科省、2014）。本実践は授業内の自由英作文指導を通して、前述した目標に資するための英語表現力並びに発信力の伸長を図る試みであると同時に、まさに「変化する社会の動きをとりこむ」べく、彼らの社会に向ける日常的な視野の広がりを促す取組でもある。

今回行った自由英作文指導実践は、１年時に初期指導を行なった 2021 年度の第 3 学年生徒を対象にしたものである。本実践と、2018 年度の第 3 学年生徒に単年度で実施した同実践（川上、2018）との比較検証を通して、改めてその変化と効果を分析する。

本自由英作文指導の始まりは、2018 年度の第 3 学年生徒に行った実践まで遡る。自由英作文のテーマ決めを生徒自身が行い、その内容を少人数グループ内で相互にアウトプットし、生徒間でコメント交換する活動で、教師が「内容の添削をしない」点に特色を持たせた試みだった。その後、あらためて 2019 年度の第 1 学年からこの自由英作文活動を組み入れた 3 年間の継続的な研究としてスタートしたのが本実践である。

2021 年度は 2018 年度と同学年を対象にしたほぼ同じ内容の実践となるが、配布用紙の記入様式など一部マイナーチェンジを行なっている。今回も多角的な観点（語数、流暢さ、テーマの選び方等）から、生徒の英作文内容を検証・分析する。生徒の英語発信力の向上と自律的な問題発見能力につながる力の育成を目指すことが主たる目的であることに変わりはない。

(2) 研究対象

本実践の対象生徒は、高校 3 年生で応用英語（2 単位）を受講する 1 学級 40 名（男子 9 名・女子 31 名）である。3 年次に数学を履修しないいわゆる私立文系タイプのクラスで、各々多様な進路目標を有

することから、当該クラス生徒の英語の学力は、上位から下位に至るまで幅広い。学力に関わらず、生徒の英語学習に対する意欲・関心は比較的高いと感じる。

(3) 指導実践期間

今回の指導を実践する期間は、2021 年 4 月初旬から、2021 年 12 月である。なお 2019 年、研究対象生徒が 1 年次にも、同様の指導実践を行っている。(川上，2019)

(4) 先行研究

まず、教師が与えるより生徒が自らトピックを選ぶ方が、その英作文の量・質（流暢さ）・取組の姿勢ともに良好な結果が期待できるとするアイデアは、2018 年度の実践と同様、Bonzo(2008)をはじめとした EFL 学習者の自由英作文に関する示唆を参考とした。また、Semke（1984)等による、教師の直接的な英文添削が必ずしも生徒の英作文活動を促進しないとする主張を元に、今回も教師は添削をせず、生徒間のコメント交換のみをフィードバックとした。

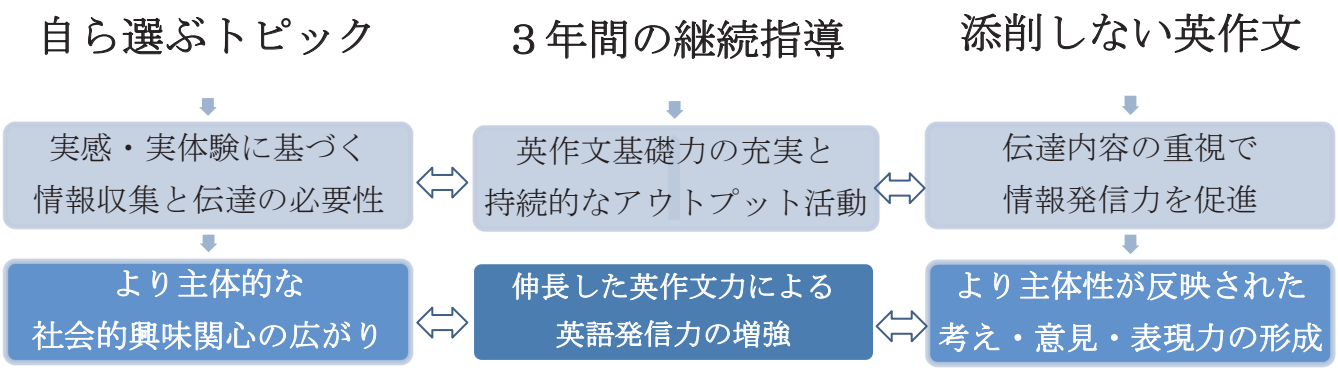
また、高校 1 年次に初期指導を行った上で継続的に指導を行う場合、単年度で実施する場合と比較してどのような変化や効果が見られるか、過年度の研究（川上，2018）を参照しながら分析する。

(5) 仮説提示

過年度の反省を活かしたアプローチ、作文機会の増加、ワークシートの改良を行ったことで、語数、流暢さ（ここでは語彙の複雑さを指標とする）の伸長が期待できる。また、トピック選びについても、自分中心の表現にとどまらず、少しずつ世の中に向くような視野の広がりを示す結果を得られると考えている。最後に同様の内容で実施した前回の実践報告（川上、2018）と比較して、初期指導の有効性や影響を検証したい。あらためて提示すると以下のような仮説となる。

> 生徒は自ら選ぶトピックで書く自由英作文を、教師が添削しなくとも、生徒の英作文活動への意欲は高まり、その語彙や語数は自ずと伸長する。また、活動で伝達する情報を生徒自ら探し続けることで、彼らの関心は、自分の身の周りのことから、やがて現在の社会の状況、諸問題へと広がりをみせる。
> また、1 年次に同様の指導を行なったことで、2018 年度実践（川上、2018）と比較し、その伸長の度合いと興味関心の広がりは、ともにより大きくなる。

＜仮説における生徒に期待する変容のイメージ＞



(6) 実践方法

1) 実践の手順

本研究では、研究対象のクラスの応用英語（学校設定科目）の授業において、身の回りの出来事について自由英作文を書き、グループ内で発表する活動を実施する。なお、「身の回りのこと」とは、過年度実践に倣い、「個人的な話題から、国際的なニュースまで興味関心があれば何でも可とし、その元となる媒体も、テレビのニュースをはじめ、インターネット、携帯、新聞・雑誌など、自分が見聞きした情報全般（川上、2018）」を認めている。

2) 指導上の工夫

①活動内容

本実践における生徒の活動はグループ活動（4 人／グループ）を主として行う。活動は「内容の検討（約 1 分）」、「自由英作文活動（5 分間）」「相互コメント」の順に行う。まず、配布したワークシート（図 1）に、個人で「気になる身の回りの出来事（以下、トピック）」を 5 分間で書く。なお、語数設定は一切せず、自分の英作文には内容のサマリーとして必ずタイトル（見出し）を付けるよう指導する。次いで、グループ内で全員が順に口頭発表した後、ワークシートを読み回して相互に実際の文面をチェックし、一言コメントを英語で残し、本人に返却する。

2018 年度実践との違いは、「相互評価」と「2nd ライティング」を無くしたことである。生徒間の評価は、2018、2019 年度実践ともに、ほとんどの生徒が特に根拠もなく「相手を高く、自分を低く」評価する傾向にあったことから、検証材料から除外した。また、生徒間添削がほとんど機能しておらず、修正もなく、ただ 2 回書くだけの 2nd ライティングになることを避けるため、これを廃止した。

図 1

Daily Topic on ....., 2021. Name_____

● Topic Category

News / Cases / Entertainment / Sports / School events / Friends and Family / About me

● Your topic　　Title: _____

.....

.....

.....

.....

.....

■ Let's exchange simple comments on topics each other! pn_____

.....

.....

②トピックカテゴリーの提示

過年度の実践で、自らトピックを選び続けることによる自動的な興味関心の広がりがあまり見えなかった（川上、2018、2019）理由として、自分がどのカテゴリーで書いているかほとんど意識されていないことが推察された。今回、ワークシート上に、「News」から「About me」まで、あらかじめカテゴリーを明示しておくことで、現在自分が書こうとしていることを明確に意識すること、そして、複数回書き続けることで自分が発信する内容の傾向を理解してもらう狙いがある。

(7) データ収集と分析の方法

1) 生徒英作文ワークシート

(6)の2)の①で示したように、生徒はA5のワークシートを使って活動し、その内容を帰宅後、現在本校で採用している「オンライン教育支援サービスclassi」のポートフォリオのアルバムに蓄積していく。今回、計20回分の英作文を分析対象としたが、最初から英作文をオンラインでデータ化することで、データ分析処理の時間を大幅に短縮することが期待できる。

また、過年度との比較検証のため、生徒作文の伸長を図る指標として、今回も前回同様、語彙の幅(The number of Unique/Different Words)」と「語数(Total number of Words)」を用いて「流暢さ」を検証する。これはBonzoが語彙の複雑さ（Lexical Complexity）を測るCarroll(1967)の指標（The total number of different words / The square root of twice the total number of all words）は“a measure of fluency”としても使えるとする主張に基づいたものである。

そして、「生徒が選んだトピックタイトル」については、生徒が書いた全英作文を分析対象とし、6ヶ月間に渡るデータから、興味関心の傾向、またその変化と推移を探る。

2) 生徒意識アンケート

2021年の4月と10月に、以下の内容のアンケートを、研究対象クラスを含む、学年全クラス（全5クラス、約200名）を対象に実施した。質問内容は以下の6項目である（表1）。

表1

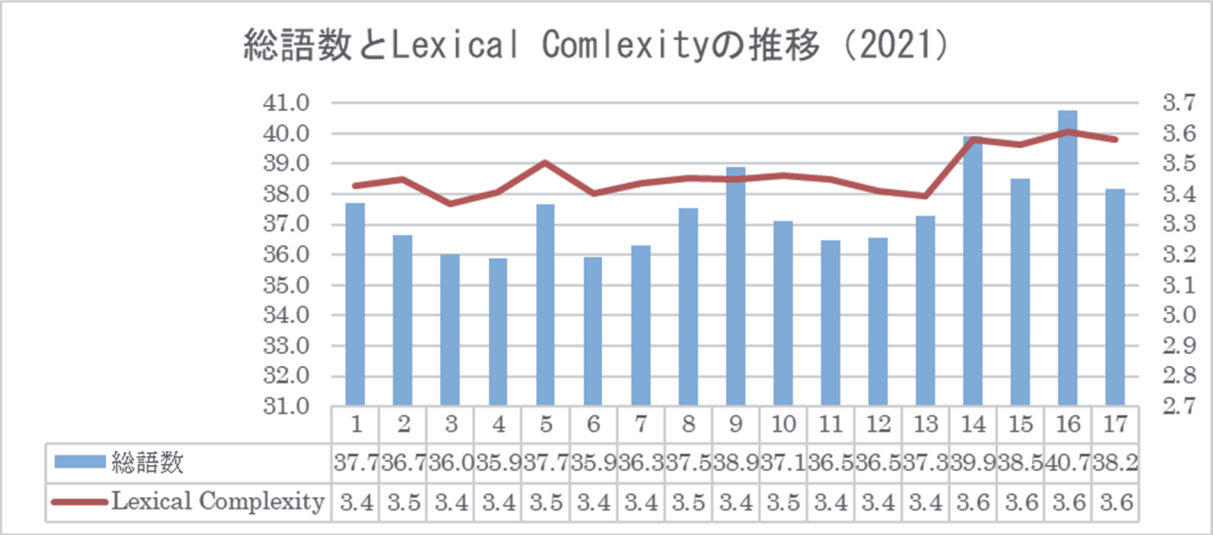
1. 身の回りのニュースや時事問題について関心がありますか。
2. 身の回りの出来事や時事問題を、日本語で人に伝えられますか。
3. 身の回りで起きたことを、簡単な英語で表現できますか。
4. 社会の時事問題について、簡単な英語で人に伝えることはできますか。
5. 授業中の活動で「英語を使って伝えることができた」と感じることはありますか。
6. 英語の授業を通じて、英語力以外にどんな力を身につけたいですか？　※複数選択可
   1) コミュニケーションする力
   2) 深く考える力
   3) 人前で話す力
   4) 問題を見つける力
   5) 問題を解決する力
   6) 協働する力
   7) 説得する力

(8) 結果

1) 語数と語彙の複雑さ

生徒英作文の語彙の幅と語数は、前回同様、オンライン上のサイト usingenglish.com 内の Text Statistics Analyser を用いて、集計し、その平均値をグラフ化した。（図２参照）

図２



前述したように自由英作文活動は、全 20 回実施したが、第 18 回以降に一部ファイルアップロード作業に行き違いがあり、提出数が半数にとどまったため、第 17 回までを有効なデータとした。

図２からは、総語数が一定のタイミングで増加する傾向も見られるが、常に増え続けるわけではない。時折、語数が増えるタイミングとして、6 月、夏休み前後、9 月の学校行事の影響が考えられる。一方、語彙の複雑さを表す数値については、3.4 台から始まり、最終的に 3.6 までに至った。事実、特に第 10 回以降、他の英語の授業で学ぶ表現を次々自分の内容に盛り込む生徒の様子がいくつも見られ、語数が停滞する割に語彙の複雑さが増しているのも納得できる。これについては、この後のタイトル分析も併せて検証する必要がある。

2) トピックタイトルの傾向

今回は当初から内容のカテゴリーを表記し、生徒が選択して書く形式をとった。(8)の 1)で言ったように、第 18 回以降はデータとして扱わないこととした。また、比較対象の過年度が全 10 回の実施であったこと、またその提出数が 9 割を超えていることから、トピックについては第 10 回までを対象のデータとする（図３）。集計の結果、⑦About me が一番多く、およそ全体の 4 割を占めた。次いで⑤Friend and Family、①News、②Entertainment そして③Sports と続いた。中には、ニュースではない地元の話や、自分ごとから離れた生活の知恵のような記述もあり、急遽新しくカテゴリー「Culture & Information」を設けて分類した。

図３

	回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合計	割合
1	News	2	6	5	1	4	8	10	10	5	4	55	14%
2	Cases	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	2	1%
3	Entertainment	9	9	3	2	5	1	5	1	2	4	41	10%
4	Sports	4	1	3	8	6	5	2	4	3	5	41	10%
5	School events	2	1	1	3	2	5	2	4	8	8	36	9%
6	Friends & Family	8	6	10	8	10	1	6	6	6	5	66	17%
7	About me	15	16	17	18	12	19	14	12	12	11	146	37%
8	Culture&Information	0	1	0	0	1	1	1	3	2	1	10	3%
	総数	40	40	40	40	40	40	40	40	39	38	397	

3）生徒意識アンケート

2021 年 4 月と 10 月実施した意識アンケートの結果は以下の通りである。（図４）左の数字が 4 月、矢印の先が 10 月の結果をパーセンテージで表したものである。なお、該当クラス以外の生徒にも同様にアンケートを実施した。

図４

１．　身の回りのニュースや時事問題について関心がありますか。※（　）内は該当クラス以外の学年生徒全員の推移

①	ある	５→　８％	（２５→２５％）
②	どちらかいえばある	７５→７１％	（５３→５３％）
③	どちらかといえばない	２０→１６％	（１６→１６％）
④	ない	０→　５％	（　６→　６％）

２．　身の回りの出来事や時事問題について、日本語で人に伝えられますか。

①	できる	１８→４１％	（２６→２６％）
②	どちらかといえばできる	５８→４１％	（５５→５８％）
③	どちらかといえばできない	２０→１６％	（１９→１６％）
④	できない	４→　２％	（　１→　０％）

３．　身の回りに起きたことを、簡単な英語で人に伝えることができますか。

①	できる	０→　８％	（　６→　５％）
②	どちらかいえばできる	４０→５１％	（３９→５２％）
③	どちらかといえばできない	５０→３８％	（４１→３３％）
④	できない	１０→　３％	（１５→１０％）

４．　社会の時事問題について、簡単な英語で人に伝えることができますか。

①	できる	０→　３％	（　２→　３％）
②	どちらかいえばできる	１０→２７％	（１４→１２％）
③	どちらかといえばできない	７３→４６％	（４５→６２％）
④	できない	１８→２４％	（３９→２３％）

５．　授業中の活動で「英語を使って伝えることができた」と感じることはありますか。

①	ある	１８→１６％	（１５→１２％）
②	どちらかといえばある	５５→５４％	（４７→６０％）
③	どちらかといえばない	２８→２７％	（２８→２１％）
④	ない	０→　３％	（１０→　７％）

６．　英語の**授業を通じて、英語力以外にどんな力を身につけたいですか？**（上位４位まで抽出）

コミュニケーションする力	１位→１位	（１位　→１位）
深く考える力	４位→２位	（　　→３位）
人前で話す力	２位→３位	（２位　→２位）
説得する力	３位→４位	（３位　→４位）
問題を解決する力		（４位　→３位）

全体で見ると、他のクラスに比べて、研究該当クラスは質問２と４で大きく変化している。質問２では、「できる」と答えた生徒が 20%以上増加した。質問４について、「できる」「どちらかといえばできる」と答える生徒がおよそ 3 倍になっている。一方、英語による発表活動を数多く重ねていながらも、質問５の回答の傾向にほとんど変化が見られなかった。また、質問６で期待したい「問題を発見する力」を求める声は、２回ともランク外となった。

(9) 考察

今回の自由英作文の分析結果（図５）に加えて、単独では見えなかったことが、過年度結果（図６）と回数を合わせて比較することで見えてきた。

図５

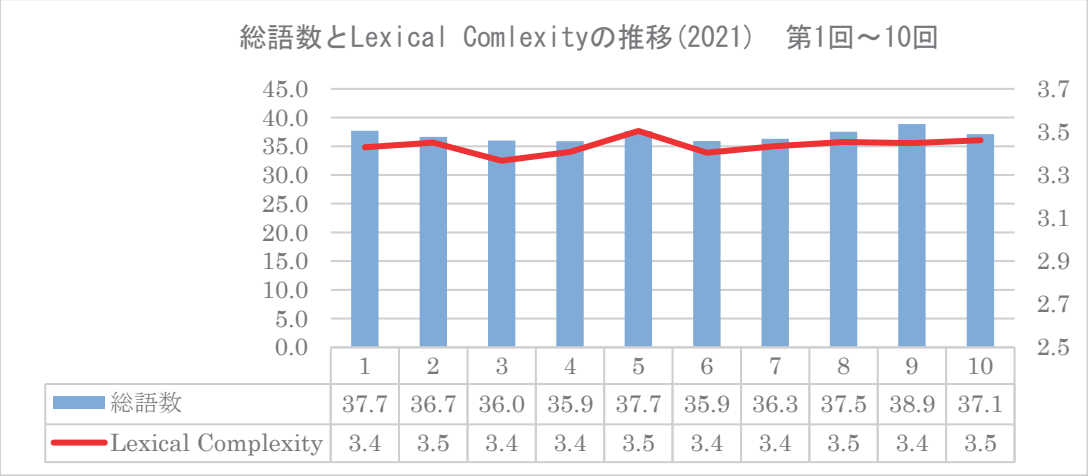
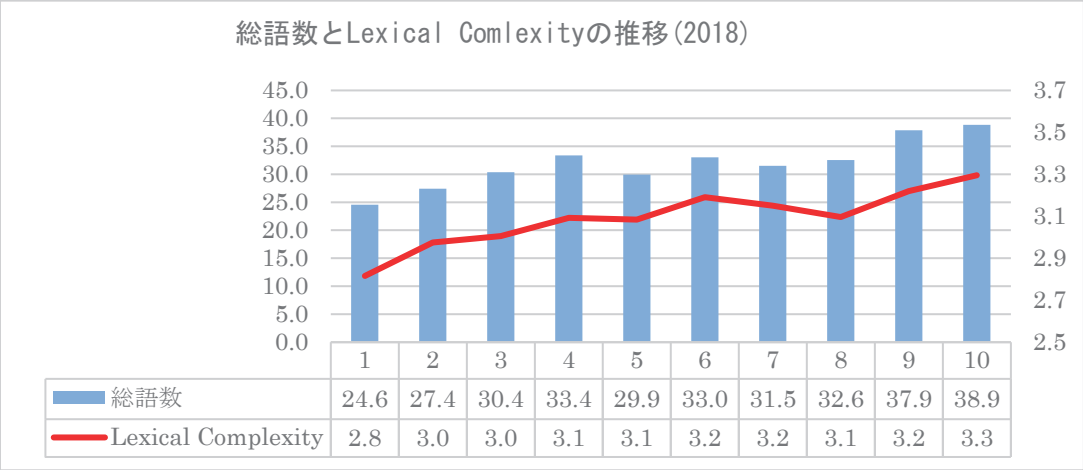


図６



過年度比較で見ると、今回の生徒英作文の語数と流暢さは、当初から高い状況にあり、半年間僅かに増減しながらも継続して推移し続けている。語数、流暢さ共に、2018 年度の最終到達地点（第 10 回）よりも高い水準が、第 1 回の時点ですでに見られたことは、今回の特徴として注目すべき点だろう。この理由の 1 つとして、今回対象とした生徒は、１年次に同活動を一定期間経験していることが推察される。2020 年度こそコロナ禍の休校等で思うように活動できなかったが、高校初年度に初期指導として行なった実践が、第３学年までポジティブな影響を及ぼしたのではないかと考えている。

次に注目したいのがトピックタイトルの傾向である。全体に対してカテゴリー「News」と「Case」を選択した割合は、合計で 15%を占める結果となった。わずか 7%に止まった過年度結果（川上、2018）の約 2 倍であり、ここに「Entertainment」と「Sports」を加えると、全体の 35%にまで届く。この過年度との比較検証から、今回の「提示したカテゴリーを生徒に選択させてから書かせる」プロセスは、「全く指定せず自由に書かせる」よりも、生徒の関心を身の回りから少しばかり世の中に向けることに

効果があったと見て良いだろう。

2回実施した意識アンケート結果は、研究該当生徒の6ヶ月間の意識の変化を如実に示したといって良い。特に質問２、３、４の「できる」「どちらかといえばできる」の割合からは、彼らの活動に向かう自信の変化が顕著に見られた。一方、半年後の質問４で、あらためて「できない」へ落ち込んだ割合はおよそクラスの４分の１になり、書き上げた英語の数が発信する英語の自信に必ずしも繋がっていない事実も明らかになった。今後は、英作文をアウトプットする回数をさらに増やすことも必要だろう。

今後に向けた大きな改善点として、流暢さをより明確に推し量るための指標の活用が考えられる。データを比較せず、単独で分析し、明示するためには、Lexical Complexity 以外を用いて検討する必要がある。今回のように「かなり制限された時間内で書かれた英作文を分析する場合」、T-Unit を検証するより「EFT（Error Free T-Unit）」を用いた方が「指標の有用性（平野、1992）」があるとする指摘もある。また、「MLU(Mean Length of Utterance)を日本人英語学習者の発達指標」として使うことで、「proficiency level の弁別に有用である（村越、2014）」ともあり、これから英語の流暢さや成長の度合いを明示させるためには、指標自体についての理解を深め、分析に活用していきたい。今後さらに、作文テーマを他教科の学習内容とリンクさせる機会を増やすことで、教科横断的な取組を深めることもできるだろう。このような自由英作文活動で視野を外向きに広げる取組を続けることで、彼らが自ら気付いて「１人称視点」から脱却し、世界を記述できる客観的視座を獲得することを期待したい。

(10) まとめ

「身の回りの出来事や趣味、場所、仕事などについて、個人的経験や自分に直接必要のある領域での事柄」について簡単に描写できれば、ＣＥＦＲ(Common European Framework of Reference for Language)Ａ２-２レベルとなる。しかし、自立した言語使用者として、グローバルな社会で活躍するためには、Ｂ１レベルの「身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる」ことを目標にすべきだろうし、更にその先にあるＢ２レベルの「幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる」準備段階として、せめて「幅広い話題」に関心を持ち、日常的に視野を広げることは、将来的な英語力の伸長に向けた有意義な取組になるはずだ。本実践は、英語力の向上のみに拘泥せず、社会的視点の拡大というアウトプット活動に関連して英語力と同時に育むべき要素をあらため提示し、その枠組みを広げる取組として実践したつもりである。

世の中を客観的に見て、自ら感じ、考えたことを自由英作文という形式で表現することで、英語運用能力に合わせて、より広く深い「社会観や自然観、人間観」が少しずつ育まれることを期待する。そしてそれらは彼らが成長したその先で、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」に影響する重要な要素になってくるはずだ。教科教育の枠内だけで収まらない充実した英作文活動のために、これからも多くを学び、試行錯誤を続けていきたい。

(11) 参考文献

Bonzo, J.D. (2008). “To Assign a Topic or Not: Observing Fluency and Complexity in Intermediate Foreign Language Writing.” *Foreign Language Annals*, 41, pp. 722-735.

Carroll, J.B. (1967). “On sampling from a lognormal model of word-frequency distribution. In H. Kucera & W. N. Francis (Eds.), *Computational analysis of present-day American English*. RI: Brown University, pp.406-424.

川上 佳則 (2018).「自由英作文指導実践報告―問題意識の育成と発信力の向上を目指して―」『愛知教育大学附属高等学校研究紀要』第 46 号，pp.69-78.

川上 佳則他(2019).「情報・経験を基にした主体的な学びを目指した活動―リテリングと自由英作文の実践を通して―」『愛知教育大学附属高等学校研究紀要』第 47 号, pp.71-83.

平野 絹枝(1992).「誤りのない T-unit の有効性に関する一考察 : 日本人 EFL 大学生の総合的英語力の測定において」『上越教育大学研究紀要』第 11 号(2), pp. 211-222

村越 亮治(2014).「日本人高校生英語学習者の英作文に見る統語的複雑さの発達」『ARCLE REVIEW 研究紀要』第 9 号, pp.17-26

文部科学省(2014)今後の英語教育の改善・充実方策について　報告　～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～平成26年9月26日　英語教育の在り方に関する有識者会議

Semke, Harriet. (1984). “Effects of the Red Pen.” *Foreign Language Annuals, 17, No.3,* pp. 195-202.